寄稿

一九〇〇年代の女性バッシング

――下田歌子と女学生

小山 静子

はじめに

日刊『平民新聞』は、一九〇七（明治四〇）年二月二三日発行の第三二号において「妖婦下田歌子!!!」という記事を掲載し、「今日の女学生が理想して措かざる下田歌子」を、これから「妖婦」「毒婦」として描いていくと予告した。そして翌二四日より第七四号（四月一三日）まで、四一回にわたって「妖婦下田歌子」を連載し[1]、下田歌子は個人攻撃されていくことになる。日刊『平民新聞』は第七五号（四月一四日）をもって最終号となるが、最終号には「下田歌子を葬る」という記事が載り、「多くの平民の女を賊しつ、ある虚栄心の権化、下田歌子に文字の爆裂弾を投じて彼女を精神的に虐殺するの志を更へざるべし」と、その文章を締めくくっている。

この連載記事自体は、有名人のスキャンダルなどを盛んに取りあげ、そのセンセーショナリズムで営業拡大していた暴露新聞の記事と同じく、品位を欠いた、根拠のあいまいな暴露記事でしかない。そのためか、これをめぐっては、政治力学の観点からの把握（前田 一九七五、山本 一九九九）や明治のセクシュアル・ハラスメントとする指摘（赤塚 一九九五）がある以外は、ほとんど論じられていないのが現状である。前田（一九七五）は、日刊『平民新聞』の狙いが「彼女（下田―引用者）の醜聞をダシに伊藤博文をはじめとする明治政府の実力者の堕落と頽廃を読者に印象づけることにあった」と述べているが、問題は、なぜ下田がダシに使われねばならなかったのかということである。このことを本論では考えていきたいと思うが、下田への個人攻撃が行われた当時、女学生へのバッシングも本格化していた。したがって、下田叩きもこの一連の流れの中で理解する必要があるように思う。

振り返ってみれば、二〇世紀において、女性が新聞や雑誌など

のメディアによって社会的に激しく叩かれたことは何度もあり、主なものでも五つを指摘することができる。一つには本論で検討する一九〇〇年代における女学生や下田歌子に対するもの、二つには一九一〇年代前半に起きた、『青鞜』に集った、いわゆる「新しい女」に対するもの、三つには一九二〇年代後半におけるモダン・ガールに対するもの、四つには一九六〇年代前半にあった、四年制の共学大学に進学した女性たちに向けられた女子学生亡国論、そして五つには一九七〇年代前半に起きた、ウーマン・リブ運動に参加した女性たちに対するものである。これらのバッシングの対象となったのは、「男のもの」とされていた中等教育や高等教育を受ける女性、しかも例外的に許容された少数のエリート女性ではなく、ある程度数が増え、その存在が目立つようになった女性たちであり、女性規範に反した生き方をしようとし、女性の解放を主張した女性たちや、下田のように社会の第一線で活躍する女性であった。男性は、個人的に誹謗中傷されることはあっても、男という性のゆえに社会からバッシングされることがほとんどないことを考えるならば、男女非対称な関係性がここに現れていることがわかる。

一九〇〇年代の女性へのバッシングは、最初の本格的な女性叩きといいうるものであり、女学生だけでなく、下田歌子という女子教育界の重鎮もターゲットになったという点で、特筆すべきものであった。しかもこの時バッシングを行ったメディアは、暴露記事で売っていた新聞だけでなく、社会主義者によって発行されていた日刊『平民新聞』や教員を主な読者とする教育雑誌である『教育時論』も含まれており、この点にも特徴がある。

いったいどのような批判が女学生や下田歌子に対して行われたのだろうか。そしてこれらの批判を生み出した社会的背景とは何であり、そこにはどのような意味が存在していたのだろうか。本論の目的は、これらの記事で書かれている内容の真偽を明らかにすることではなく、このようなバッシングがなぜ行われたのか、その歴史的意味を考察することにある。そのことを通して、二〇世紀初頭の日本において女性がおかれていた状況を明らかにしていきたいと思う。

一　女学生バッシング

（一）萌芽としての一八八〇年代後半

女学生に対する批判は二〇世紀に入ってから突如なされたのではなく、その前触れといいうるものが、規模は小さいものの一八八〇年代後半に起きている。

一八八三（明治一六）年に鹿鳴館が完成し、条約改正をめざした欧化主義の時代の幕が開いたが、それは女性にとっては、女性改良がさまざまに論じられ、私立学校を中心に女学校が設立されていく時代の到来を意味していた。もちろん、男子の中学校に比べれば女学校の数はかなり少なく、また一八九九（明治三二）

年の高等女学校令公布後に公立高等女学校が本格的に設立されていく状況とは異なっている。しかしそれでも、欧化主義の風潮の下で女子教育熱が興り、次第に女学生の数も増えていった。『学制百年史　資料編』によれば、高等女学校本科の生徒数は、一八八五（明治一八）年に六一六人だったのに対して、一八八七（明治二〇）年には二三六三人、一八八九年（明治二二）年には三二七四人となっている。[2] そして女学生の増加と歩調を合わせるかのように、女学生に対する批判的言辞も登場し、女学生の風儀が問題化していくことになる。

村上信彦によれば、「明治二二、二三年……の頃の新聞で女学生攻撃の記事を掲載しなかったものはほとんどない」（村上 一九七七 二三七頁）のが実情であり、女学生の品行の悪さ、さらには女学生の間での花柳病の蔓延までが書き立てられていったという。『教育時論』でもいくつかの記事を掲載しており、「高等女学校の醜聞以来、官立私立とも女学校の取締は、幾分か鄭重となりたれば、何れも女学校生徒の風儀は少しく改まりたるが如し」[3]と述べつつも、女学生には種々の醜聞があることを指摘していた。まさに稲垣恭子が言うように、「鹿鳴館的な社交や男女交際への反感」として女学校と女学生に対する批判が生まれ、「女学生の品行をめぐる風聞が捏造を含めて絶え間なく生産され、その内容もエスカレートしていった」（稲垣 二〇〇一 二六七頁）のである。

しかも性に関わる批判だけでなく、『教育時論』には、英語の授業に力を入れた女学校に対して、「純然タル西洋風ノ女子教育所ナリト云ハザルヲ得ズ」[4]と、欧化主義に棹さした教育を批判する記事も掲載されていた。また「女学生の中には、……免角（ママ）生意気に走るものありて、女子の徳義を破ぶり、女子にして大言放語、男子の風を真似び、殆ど女子の本分を忘るるもの甚多し」[5]と、教育を受けることで生意気となり、女性規範から逸脱する女学生がいることを問題視する意見も出されていた。

このような中、中島とし子（岸田俊子）は『女学雑誌』第二四一号（一八九〇年一一月二九日）に「生意気論」を発表している。ここにおいて彼女は、女学生が生意気と非難されることに対して「生意気なりと為る眼よりこれを観るときは、一つとしても生意気ならざるなきはなし、また生意気ならずと為すの眼よりこれを観るときは一も生意気なるのところなかるべし」と述べ、女学生を見るまなざしこそが問題であると指摘していた。これは慧眼である。そして彼女は「生意気ならざる即ち生気あるの女学生少なからざるを信ず」と述べ、女学生を擁護している。

しかしこのような主張はまったくの少数意見であり、女学生批判の言辞ばかりが目立っていたが、やがて欧化主義の政策が打ち切られ、女子教育熱が下火になると、[6]自然と女学生の「問題」を取りあげる声はなくなっていった。

一八八〇年代後半の女学生バッシングは高等女学校令が出る前のことであり、女学生の数も高等女学校令以後と比べればかなり少なく、その広がりも限定的であった。しかし女学生が目立ちは

じめた途端に、彼女たちに対して批判的言辞が浴びせられたということには、注意しなければならないだろう。なぜならそこには、女性が教育を受けるということに対する、社会の許容しがたいまなざしが如実に示されているからである。女性が学校教育を受けるということ、このことは、親の監督下にあった家を離れて、親の目の届かない時間と空間を過ごすということを意味しており、さまざまな「危険」に出合い、女らしさや女性役割から逸脱する可能性があると見なされたのである。女性への教育は、男性への教育とはまったく異なる意味づけがなされていた。そして一九〇〇年代に入ると、女学生の数は飛躍的に増加し、女学生に対するバッシングも激しさを増していくことになる。

(二) 時代背景

女学生へのバッシングがどのようなものであったのかについて述べる前に、このような動きが起きた時代背景をまずは簡単に述べておきたい。

言うまでもないことだが、女学生がバッシングの対象となるためには、女学生がいなければならない。そしてその女学生の数は、二〇世紀に入ると格段に増加していった。というのも、一八九九年に高等女学校令が出された時、その附則において、地方長官(知事)は一九〇三(明治三六)年までに高等女学校の設置を義務づけられ、以後、続々と公立の高等女学校が設立されていったからである。そしてそれにともなって、私立学校も都市部を中心に増加していった。表1は、高等女学校本科の生徒数と入学者数の変遷を示したものであり、比較のために中学校の入学者数もあげておいたが、[7] この時期にいかに女学生の数が増加していたかがわかるだろう。しかもこの表に示されているのは、文部大臣によって認可された高等女学校の生徒数だけである。女学校の中には、認可を受けずに高等女学校に類した教育を行う各種学校が多数存在していたが、そのことを考えるならば、実際の女学生の数はもっと多かったことになる。また女子のための高等教育機関の設置も進み、女子英学塾(一九〇〇年)、東京女医学校(一九〇〇年)、日本女子大学校(一九〇一年)、女子美術学校(一九〇一年)などが設立されていった。

表1　高等女学校生の増加

	高等女学校本科生徒数	本科入学者数	
		高等女学校	中学校
1899年	7,446	2,617	25,311
1901年	14,671	4,430	27,310
1903年	21,687	6,512	26,809
1905年	26,756	8,109	29,181
1907年	34,735	10,917	30,943
1909年	46,144	13,775	31,282

各年度の『文部省年報』より作成

このように、女学生の存在自体が急速に目立つものになったことが、女学生バッシングの重要な要因であることは疑いないが、さらにバッシングした側であるメディアの問題も指摘しておかなければならない。女学生バッシングを盛んに行った代表的なメディアは『万朝報』と『二六新報』であったが、両紙は有名人のスキャンダルを暴き立てた暴露記事で、労働者や職人などの庶民層から喝采を以て迎えられていた。[8] その典型が、一八九八（明治三一）年七月から九月にかけて『万朝報』で連載された、「弊風一斑　蓄妾の実例」という記事であり、そこでは延べ五一〇人が俎上にあげられている。センセーショナルな記事を載せて庶民の人気を得、それを部数の拡大につなげる、という販売戦略が両紙にはあり、この流れの中で女学生も取りあげられたのであった。

そしてもう一点、女学生バッシングを生み出した要因として考えられるものが、一九世紀末から人々の耳目を集めていた学生風紀問題である。本来学生とは帝国大学生を指す言葉であるが、ここでいう学生とは中等教育以上の教育を受けていた男性の学生・生徒のことを意味しており、彼ら、とりわけ中学生の風紀の「頽廃」が、この当時「問題」として大々的に論じられていた。どのような「問題」があったかといえば、斉藤利彦によれば、「中学生の華美、驕奢にわたる風俗、あるいは彼らによる頻繁なる暴行沙汰、賭博、万引き、さらには同性および異性に対する醜行、そして私通、蓄妾等に現れた、著しい頽廃の傾向であった」（斉藤　一九九五　二一一頁）という。実態として、どの程度このようなことが行われていたかは定かではないが、「当時の新聞には様々な「風紀の乱れ」が見世物的に載せられ、雑誌にはこの「問題」について様々な見解が寄せられ」（和崎　二〇一七　一五四頁）ていた。

一八九〇年代後半は中学生の数が急増した時期であったが、まさにそれをうけて、世紀転換期には中学生などが批判の対象となっていたのである。[9] 義務教育以上の教育を受ける者に対して、何か「問題」を見つけてメディアで叩くということは、まずは男子学生を対象に行われ、二〇世紀に入ると、女学生へと対象が変化していったといえるだろう。

（三）一九〇〇年代の女学生バッシング

では、女学生はどのような存在としてとらえられ、どのように描かれたのだろうか。このことに関しては、すでにいくつかの研究で詳細に論じられているので、[10] ここでは要点を述べるにとどめたいと思うが、まず指摘しておきたいことは、女学生の「堕落」の物語がこと細かに描かれたことである。その最たるものが、一九〇二（明治三五）年八月二三日から一一月九日まで二か月以上にわたってほぼ毎日、『二六新報』上で繰り広げられた「女学生腐敗の真相」という連載記事である。この記事では、女学生がいかに「腐敗・堕落」しているのかが、とりわけ性的な視点から、住所も記された実名入りで極めて具体的に語られていた。たとえ

ば、下宿屋での女学生の生態（雑然とした不潔な部屋、頻繁な男性の出入りなど）、男女が知り合い、交際し、性関係をもつまでの過程や手段、艶書の文章、売春や花柳病の罹患、はては妊娠や堕胎などが書かれている。

このような記事は枚挙に暇がなく、『万朝報』では「女学生の醜行」（一九〇一年七月六日）、「女学生の淫売」（一九〇二年七月一三日）、「淫奔堕落二人女生徒」（一九〇五年三月七日～一〇日）、「堕落女生淫売婦となる」（同年三月一一日）、「男女学生の暗黒面　女学生の堕落」（一九〇六年七月三日、五日、一一日）などが掲載されていた。また『日本人』には「女学生」（一九〇三年六月二〇日）、『日本』には「警察より見たる学生風紀問題」（一九〇五年四月七日、九日、一二日）という記事があり、堅い教育雑誌の印象がある『教育時論』でも、「男女学生の取締方針」（一九〇五年六月五日）や「警察官の堕落学生談」（一九〇五年九月五日）などでは、女学生が「妾」や「高等淫売」と表現されていた。[11] さらに風刺で有名だった『滑稽新聞』でも、一九〇五（明治三八）年から一九〇六（明治三九）年にかけて、「多情」で「身持ちの悪い」女学生の風刺画を多数掲載している。

これらの記事は、どれも似たり寄ったりの内容であり、女学校に通うということは性的に「堕落」することであるというメッセージが、さまざまなメディアで流され続けていたことになる。また菊池幽芳『己が罪』（一八九九～一九〇〇年）、小杉天外『魔風恋風』（一九〇三年）、小栗風葉『青春』（一九〇五～一九〇六年）、田山花袋『蒲団』（一九〇七年）などの小説では、女学生が恋愛や性関係によって「堕落」していくという物語が描かれていた。『己が罪』は『大阪毎日新聞』、『魔風恋風』と『青春』は『読売新聞』の連載小説だったこともあり、これらは大変な評判となり、多くの読者を獲得している。

さて、第二に指摘しておきたいことは、「堕落」していると書き立てられた女学生が実はニセ女学生の可能性があったこと、つまり記事が真実ではなかったことを、女学生バッシングを展開したメディア自身が認めていたことである。すなわち、『二六新報』では連載を開始した八月二三日の記事において、「女学生となす者の多くは所謂淫売婦たるの一事を明かにし聊か先づ女学生の為に冤を雪がざる可らず」と書いていた。ただ、このように女学生の冤罪を晴らすといいながら、「外観の自己に似たる者をしも猶（ママ）ほ自己の仲間と見做さしむるの責は確かに是女学生の負はざる可らざる処なり彼等は社会より疑はるゝだけ侮らるゝだけそれだけ甚しく腐敗し堕落しつゝあるを奈何せん」と述べ、「女学生腐敗の真相」を連載することを正当化していた。つまり、火のない所に煙は立たぬという理屈で、『二六新報』は女学生が「問題」だという暴露記事を書き続けていったのである。

記事が真実でないことはよく知られていたようで、『婦女新聞』『教育時論』『中央公論』『万朝報』などが、批判されている当事者が必ずしも本当の女学生ではないことに言及していた。[12] また『二六新報』では、実名をあげて散々書いたあげくに、間違いだっ

たと訂正記事が出たりもしている。[13] 要するに、真偽が定かではない、いい加減な記事が多く、それが周知であったにもかかわらず、女学生は槍玉にあげられ、人々の好奇の目にさらされていったといえるだろう。

そして第三に指摘できることは、「多数の女生等が所謂海老茶の袴を穿ち翩々として来往し、中には自転車などに駕して飛走するものあるを見て、生意気となし、お転婆となし」[14]というように、女学生の服装や行動が「生意気」や「お転婆」ととらえられたことである。束髪に袴という女学生の出で立ちは、女学生以外はあまりしないものであったから、往来では目立つことになり、女学生の服装は華美と奢侈の傾向があると批判されていった。[15] また女学校に通うことができる階層の女性は、本来なら「深窓の令嬢」であったから、「お転婆」な女学生の行動は、いうまでもなく当時の「女らしさ」から逸脱していた。

しかも「生意気」なのは姿だけではなく、「凡べてが生半可で居ながら、一を聞いて十を知る、何もかも呑みこんだ風に、ベラ〳〵喋る、ヅカヅカ出しやばる、少しも女らしい所がない」、[16]「高等女学校の教科は之れを男子の中学校と比較して大差なきもの。……女学校に於ては脳力のより薄弱なる女子に粗彼等と同一なる教科を授く」[17]というように、教育を受けること自体にも向けられていたのである。そしてこれは、良妻賢母の育成を掲げた高等女学校教育はいかにあるべきかという問題にもつながっていた。高等女学校は中等普通教育機関であったから、中学校教育に比べれば普通教育の授業時間数が少なかったものの、総体としては普通教育に重点がおかれていた。しかし他方で、女子への教育といえば、裁縫そして家事といった、将来の家庭内役割に直結する実用的な教育だと考える人もいれば、古文や和歌、生花や茶の湯といった女性としてのたしなみを中心とした教育を思い浮かべる人もいたのが、当時の状況である。このような人々からすれば、それまで「男のもの」とされてきた中等普通教育を受ける女学生は、「生意気」な存在以外、何者でもなかったのだろう。

このように見てくれば、一九〇〇年代の女学生バッシングのありようは、一八八〇年代後半に行われた女学生バッシングと、論理としてはほとんど変わらないことがわかる。ただ一九〇〇年代においては、高等女学校教育がすでに制度化され、女学生の数も増え続けていたから、政府としてもこの問題を看過するわけにはいかなかった。そこで文部省は、一九〇二（明治三五）年九月一六日に女学生取締りの内訓[18]を発したのを手はじめに、一九〇六（明治三九）年六月九日には文部省訓令第一号、いわゆる学生風紀に関する訓令[19]を出すなど、風紀取締りの方針を打ち出していった。さらに一九一〇（明治四三）年一〇月二六日には高等女学校令の改正を行い、裁縫教育を重視した、そして自宅からも通学できるように高等小学校への併設も認めた、実科高等女学校制度の創設を行っている。

また女子教育家たちは、一九〇九（明治四二）年九月二八日に「新女大学」と呼ばれた「べからず十訓」[20]を出し、徳育の強化を図っ

ていく。さらにいえば、女学生バッシングに批判的だった『中央公論』では、一九〇五(明治三八)年九月から翌年の八月にかけて、二〇編以上の男女交際論を掲載しており、そこでは男女交際の可否、あるべき男女交際のあり方などに関して、議論が行われていた。『中学世界』でも「男女交際」や「恋愛」など、それまでほとんど掲載されることのなかった男女関係をテーマとする記事や評論が噴出」(前川 二〇一一 八八頁)しているという。

本論の目的は、男女の関係性が学生風紀問題や女学生バッシングを通してどのように構築されていったのかを検討することではないので、男女交際論の内容については論じないが、下田歌子への個人攻撃は、このような時代状況の下で行われたのであった。

二 下田歌子バッシング

下田歌子へのバッシングを行った日刊『平民新聞』は、「天下に向つて社会主義的思想を弘通する……世界に於ける社会主義的運動を応援する」(「宣言」日刊『平民新聞』第一号、一九〇七年一月一五日。以下、日刊『平民新聞』からの引用に際しては、掲載された月日のみを記す)ことを目的として創刊されたものである。平民社の創立人は、石川三四郎、幸徳秋水、堺利彦、竹内兼七、西川光二郎の五人であり、幸徳主筆、堺編集局長、石川編集長の体制であった。そして関口すみ子によれば、「セクシュアリティに関わる暴露と非難は、日刊『平民新聞』の一側面、路線の一つ」であり、「こうしたイエロー・ジャーナリズムぶり――これによって販売促進をはかり、読者層と財政基盤を確保する――は、『萬朝報』から引き継いだ[21]、いわば経営方針に他ならない」(関口 二〇一四 三二頁)という。

このような性格は、日刊『平民新聞』がキリスト教批判を展開するために、教会の暴露記事である「メソヂストの醜態」を第二三号(二月一三日)から第二八号(二月一九日)まで、「霊南阪(ママ)教会の堕落」を第三五号(二月二七日)から第四八号(三月一四日)まで連載し、牧師たちが金銭問題や性問題で「乱れ」ていることを書き立てていたことにも現れている。下田歌子に対するバッシングも、このやり方を踏襲したものであるといえるだろうが、下田叩きの前には、「目白の花柳郷」が第二号(一月二〇日)から第二三号(二月一三日)まで、二一回にわたって連載されていた。そこで、下田の記事について考察する前に、まずはこの記事について検討していきたい。

(一)「目白の花柳郷」

「目白」というのは、東京の目白にあった日本女子大学校のことを指しており、この連載の予告記事において、「女子大学の真相を剔抉す」(一月一五日)ることが、その目的として宣言されている。タイトルに「花柳郷」という言葉があるため、日本女子大学校の女学生が「堕落」し、「不品行」を重ねており、そのことを花

柳郷になぞらえて批判している記事のように見えるかもしれない。しかし実はそうではなく、これは日本女子大学校の創設者である成瀬仁蔵、ひいては学校のあり方を批判する記事であり、花柳郷のような学校にしているとして、成瀬が槍玉にあげられているのである。そしてこの連載に対して、「或人は余りに下劣なりとて眉を顰むるも之ある可し、又或人は案を打て痛快なりと叫ぶも之ある可し」（一月二五日）という状態であったため、石川三四郎は連載の意図を次のように説明している。「女子大学は今の世に於て実に模範的成功をなせるもの、故に最も多く現代社会の弊毒を集積せり、吾人の特に同大学を選んで之に論評の筆を加へんとする所以、唯だ此にあり」（一月二五日）。

そもそも日本女子大学校は、伊藤博文や廣岡淺子などの政界や財界の後援者たちが基金として三〇万円を作り、土地は三井家から五五〇〇坪の寄贈を受け、さらに皇后からも下賜金二〇〇〇円を贈られて、開校した学校である（金森・藤井 一九七七 四四頁）。そして設立当時の創立委員には、岩崎彌之助、大隈重信、嘉納治五郎、近衛篤麿、西園寺公望、澁澤栄一、住友吉左衛門、辻新次、三井高保などの、政界、財界、教育界の大物が名を連ねていた（日本女子大学校 一九四二 七二〜七三頁）。そういう意味では、同時期に設立された女子英学塾や東京女医学校とは趣を異にしており、社会主義者が日本女子大学校に批判的まなざしを注いだことには、宜なるかなと思わないでもない。

しかし問題は、なぜ成瀬批判、学校批判を展開するにあたって、記事のタイトルに「花柳郷」という言葉を使ったのかということである。この連載記事の内容は大きく五点にわたっており、女学生による接待、成瀬の拝金主義、学費や諸経費の高さ、教育の不十分さ、管理主義的な寄宿舎、が批判されていた。これらのうち、花柳郷というネーミングが当てはまるのは、あえて言えば、女学生による接待に関する記事だけである。具体的に述べてみたい。

「目白の花柳郷（一）」（一月二〇日）では、「早稲田よいとこ目白を受けて、魔風恋風そよ〳〵と」という俗謡が紹介され、早稲田と目白、つまり東京専門学校と日本女子大学校に在学する男女の間には、小杉天外の小説『魔風恋風』の内容を思い起こさせるようなことがあるかのような印象を読者に与えている。しかし日刊『平民新聞』としては、女学生のような「弱きもの、弱点を許きて快とするが如き狭小なるものに非ず」であり、「女子大学楼の楼主成瀬仁蔵」のことを俎上にあげると言うのである。

では、学校で何か起きているのか。「目白の花柳郷（二）」（一月二一日）が取りあげているのは、運動会である。運動会は「運動が三分、お客の招待が七分の目的」で行われており、この招待にこそ「同大学をして文明の虚栄城たり花柳郷たらしむる要因」があるという。というのも、運動会では粧いを凝らした女学生に「服装美しき貴族富豪の堕落息子」を接待させ、「青年男女の淫心を挑発」させていたが、そこには「後に是等貴族富豪の子弟に生徒を売り付けて学校と上流階級との因縁を作らんとする卑劣極まる下心」があったからであるという。また二〜三年前の運動会で

は、天女の羽衣をまねた薄物を女学生に着せて舞わせたといい、そのことをこの記事は「裸体活人画」と表現していた。そして「吉原に張店したる娼妓、柳原に助平君の袖引く夜鷹と女子大学の運動会との間に果して如何なる差異のあるべきかは一寸むづかしき疑問なり」と、この記事を締めくくっている。さらに「目白の花柳郷（十二）」から「目白の花柳郷（十五）」では、「十日にあげず様々の『貴顕紳士』を校内に招待して御馳走」を行う招待会の様子が描かれており、そこで女学生は「其の良心と肉を切売する酌婦たらしむるもの」になっていた（二月二日）という。[22]

このように見てくれば、日刊『平民新聞』が成瀬を批判するために、女学生のセクシュアリティに視線を向け、読者の目を引くためのアイ・キャッチャーとして女学生を利用したことは間違いない。そしてそれが可能となったのは、日刊『平民新聞』が女学生を、教育を受ける存在というよりはむしろ、性的存在、しかも成瀬の意のままに振る舞う客体として見ていたからである。ここに端なくも彼らの女性観が示されているように思える。日刊『平民新聞』は、女学生バッシングのように、直接的に女学生を叩いてはいないが、女学生観において両者には共通するものがあったといえるだろう。しかも注意しなければならないのは、運動会や招待会に関する記事は連載全体の三分の一にも満たなかったことであり、それにもかかわらず、「花柳郷」という思わせぶりなタイトルをこの連載に付けていたことである。そして性的視点から対象を論じることは、管理主義的な寄宿舎を批判する際に、女性の寮監について次のように述べていたことにも現れていた。「生徒に対しては独断専横の振舞多く、外、世人と交はるに放蕩淫逸、宛として這れ不見転芸妓の態あるを見る」（一月二三日）。これらの点に、日刊『平民新聞』の姿勢、つまり、関口すみ子がいうところのイエロー・ジャーナリズムぶりが、示されていると言わねばならない。

では、このような日刊『平民新聞』は、下田歌子をどのようにとらえたのだろうか。

（二）「妖婦下田歌子」

下田歌子バッシングの記事を検討する前に、一九〇七（明治四〇）年当時、彼女がどのような社会的地位にあったのかを簡単に述べておきたい。下田は安政元（一八五四）年八月の生まれであるから、この記事が出た時には五二歳である。彼女は一八九五（明治二八）年に欧米への教育視察から帰国した後、華族女学校学監兼教授に復帰したが、華族女学校は一九〇六（明治三九）年に学習院女子部となったため、連載時には女学部長の地位にあった。他方で、一八九八（明治三一）年には帝国婦人協会を組織し、翌年には同会附属実践女学校及び女子工芸学校を創設して、校長の職に就いている。つまり、学習院女子部と実践女学校・女子工芸学校という、官立と私立の二種類の教育機関で要職を務めていたことになる。しかもそれだけでなく、一九〇一（明治三四）年

の愛国婦人会の設立に参画し、旺盛な執筆活動も行うなど、実に精力的に活動していた。そして一九〇六年には正四位に叙せられている。まさに脂が乗りきった状態であり、多方面に活躍するとともに、女性としては稀に見る高い社会的地位を得ていたのであった。

このような下田歌子に対して、日刊『平民新聞』は何を語っていたのだろうか。まず指摘しておかなければならないことは、彼女が「女」だったことである。何を当たり前のことと思われるかもしれないが、「妖婦下田歌子」の第一回の記事の冒頭部分では、「女だてらの正五位の栄位」（二月二四日）という表現が使われていた。つまり、高位（正確には正五位ではなく正四位）にあるのは女にあるまじきこと、というニュアンスがここから読み取れるのである。すでに述べたように、女学生バッシングには、「男のもの」であった中等教育を女性が受けること自体に対する反感が潜んでいたが、日刊『平民新聞』もまた、下田という「男の世界」で活躍する女性に対する不快感を有していたといえるだろう。

しかもそれにとどまらず、日刊『平民新聞』にとって、下田は「階級の敵」でもあった。下田は、「吾人平民が不倶戴天の仇敵なる彼の紳士閥を擁護する」（二月二七日）者であり、「貴族の奴隷、上流社会の幇間」（四月六日）であるという。敵方の、しかも女という二重の意味で、彼女はバッシングの対象となったのであり、だからこそ彼女は「妖婦」と呼ばれ、徹底して叩かれたのである。日刊『平民新聞』の表現を借りれば、「文字の爆裂弾を擲つて其の貴族的迷信と虚栄的驕慢を警醒」させ、「精神的死刑を与へて再生して『新らしき人』として懺悔」させることが、「吾人の願」なのであった（二月二七日）。

「妖婦下田歌子」は、まず下田が「明眸皓歯、曲眉豊頬、何一つ点を打ちそうな所はなく、太平の象を備へ幽雅の姿を有てる」こと、「姿美しく才秀でたる名誉を一人にて担ふ」ことを指摘している（二月二四日）。そして彼女は孟子・老子などの漢学や源氏物語などの古典文学にも造詣が深く、さらにはバイロンなどの英詩にも親しんでいるという（二月二四日）。またかつて宮中に出仕していたころには、和歌のみならず、裁縫、琴、茶の湯、生花まで上達しており、「何を競ひても歌子の右に出ずるものなきより舌を捲いて驚嘆するばかりなりき」（二月二七日）という状態だったと述べている。いわば、あらゆることに優れた能力をもち、しかも美しくもあるという、スーパー・ウーマンとして下田のことを語っていた。しかしこれは、いわゆる誉め殺しである。

日刊『平民新聞』のやり方は、まず下田に対する高い社会的評価を紹介し、その上で「妖婦」としての「実像」を暴くというものであったが、その多くがセクシュアリティに関することであった。この時期に盛んに行われた女学生バッシングでは、女学生の性的な「堕落」が真偽定まらぬままに書き立てられていたが、それは下田への誹謗中傷にも当てはまる。夫に先立たれた[23]、しかも才色兼備で高い社会的地位を有する下田は、人々の好奇心の的となり、格好の新聞種になったのではないだろうか。

日刊『平民新聞』の筋書きは、伊藤博文に強姦された下田が、それによって「『欲』と『名』の悪魔に依りて新らしき洗礼を与へられ」（三月一日）、「娼妓の如く」（三月二日）、井上馨、山県有朋、陸奥宗光、松方正義などの有力政治家と次々と関係をもち、それを足がかりとして立身出世の道を歩むことになるというものである。「花の如き美貌と火の如き才情」（三月五日）をもった彼女は、「交際社会の女王」（三月五日）となっていき、「成功に狂せし歌子は憐れなるものならざりしか」（三月七日）ととらえられながらも、「奔馬の如き歌子の才情と人を吸引する磁石の如き一種の魔力」（三月一二日）をもった人物として語られていった。

記事の内容はあまりに下品であり、しかも何が真実であるのかはっきりしないため、ここで書くのは遠慮したい。ただ記事には家の間取り図、下田についての見聞を記した読者からの投書、下田への艶書などを交えて、もっともらしく読ませる工夫がなされており、下田の「実像」が具体的かつ詳細に述べられている。そして四一回の連載中、半数以上が、彼女の性関係や恋愛の記述などで埋め尽くされており、[24] その筆致は『二六新報』などと変わるところはなかった。しかもこの連載記事を参考にしながら、志茂田景樹『花の嵐――明治の女帝・下田歌子の愛と野望』や林真理子『ミカドの淑女』などの、下田を主人公にした小説が発表されているので、日刊『平民新聞』に書かれた下田歌子像は広まっているように思う。[25]

おわりに

本論の目的は、なぜ下田歌子がここまで罵倒されなければならなかったのかという問題を明らかにすることであり、下田への個人攻撃を当時の時代状況において理解することであった。そのために、下田へのバッシングと同時期に起きていた女学生バッシングも取りあげ、それとの関連性において、下田へのバッシングを考察しようと試みた。その結果、何が明らかになったのか、最後にまとめておきたい。

下田へのバッシングと女学生へのそれとに共通するものは、言うまでもなく、「女であること」に由来する。そしてそれには二つの意味が含まれていた。一つは、下田や女学生が性的存在というまなざしでとらえられ、性的な「堕落」が非難の材料として取り沙汰されたことである。それが真実かどうかは問題ではなく、「堕落」の物語を語ることこそが重要であり、それによって人々の関心を引きつけ、販売部数を伸ばすというメディア側の戦略が存在していた。社会主義者が発行していた日刊『平民新聞』も、この点においては『二六新報』などの暴露新聞と同様であり、女性をアイ・キャッチャーとして使っていた。そして下田や女学生の性的側面に注目が集まり、それがクローズ・アップされたということは、女性というものを性的存在として見つめる、中島とし子の顰みに倣っていえば、そのようなものとしてしか見つめることができない、書き手の側のまなざしが浮き彫りになっているとい

うことでもある。この点において、暴露新聞、教育雑誌、社会主義の新聞という、メディアによる違いはなかった。

もう一つの「女であること」の意味は、下田や女学生が「生意気」と見られ、反感が抱かれたということである。下田歌子は高い社会的地位を得た女性であり、女学生たちは中等教育を受ける女性であった。つまり、「男の世界」で活躍し、「男のもの」とされていた教育を受けていたのであり、彼女たちは、男性を想定して作られていた従来の制度や社会秩序を攪乱する存在だったといえるだろう。そういう存在に対して社会は不寛容であり、彼女たちはそれまでの規範としての女性像から逸脱する者と見なされたがゆえに、バッシングを受けたのだった。そして女学生バッシングは、女子中等教育が制度化され、女学生の姿が目立ちはじめた一九〇〇年代だからこそ起きた現象であり、女学生の数がもっと増加する一九一〇年代になると、沈静化していくことになる。

ただ下田へのバッシングには異なる事情もあった。というのは、下田が「女であること」というだけでなく、社会主義者にとっては「階級の敵」だったからである。日刊『平民新聞』はもちろん単なる暴露新聞ではなく、社会主義思想を広めるためのメディアであり、だからこそ、日本女子大学校や下田歌子は「階級の敵」として叩かれた。そういう意味で、下田に対しては二重の反感が向けられたのであり、それゆえ、日刊『平民新聞』で執拗に誹謗中傷記事が書かれ続けたといえるだろう。

一九〇〇年代の女性バッシングは、二〇世紀に起きるいくつかのバッシングの原型と言いうるものである。それぞれのバッシングには、その時期特有の理由もあるが、女性を性的存在と見ることから生まれる「堕落」の物語や、男性を想定して作られている既存の社会秩序を脅かす者に対する反感は、繰り返し語られていくことになるのだった。

参考文献

- 赤塚行雄「『下田歌子伝』の困難――明治のセクシャル・ハラスメント」『日本及日本人』第一六一七号、一九九五年一月。
- 稲垣恭子「明治の「堕落」女学生」『文化伝達の社会学』世界思想社、二〇〇一年。
- 稲垣恭子「不良・良妻賢母・女学生文化」『不良・ヒーロー・左傾』人文書院、二〇〇二年。
- 稲垣恭子『女学校と女学生』中公新書、二〇〇七年。
- 金森トシエ・藤井治枝『女の教育一〇〇年』三省堂、一九七七年。
- 小山静子「メディアによる女学生批判と高等女学校教育――女性が教育を受けることはどのようにとらえられたか」『知の伝達メディアの歴史研究』思文閣出版、二〇一〇年。
- 斉藤利彦『競争と管理の学校史』東京大学出版会、一九九五年。
- 渋谷知美「「学生風紀問題」報道にみる青少年のセクシュアリティの問題化――明治年間の『教育時論』掲載記事を中心に」『教育社会学研究』第六五集、一九九九年。
- 澁谷知美『立身出世と下半身――男子学生の性的身体の管理の歴史』洛北出版、二〇一三年。
- 関口すみ子『管野スガ再考――婦人矯風会から大逆事件へ』白澤社、二〇一四年。
- 谷川健一・鶴見俊輔・村上一郎編『ドキュメント日本人9　虚人列

伝』学芸書林、一九六九年。
● 日本女子大学校編『日本女子大学四十年史』一九四二年。
● 深谷昌志『良妻賢母主義の教育』黎明書房、一九六六年。
● 前川直哉『男の絆――明治の学生からボーイズ・ラブまで』筑摩書房、二〇一一年。
● 前田愛「下田歌子――明治宮廷政治のヒロイン」『思想の科学』一九七五年九月→『前田愛著作集3』筑摩書房、一九八九年。
● 村上信彦『明治女性史(二)女権と家』講談社文庫、一九七七年←『明治女性史　中巻前篇　女権と家』理論社、一九七〇年。
● 山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局、一九八一年。
● 山本博雄『妖婦下田歌子――『平民新聞』より』風媒社、一九九九年。
● 米田佐代子『平塚らいてう――近代日本のデモクラシーとジェンダー』吉川弘文館、二〇〇二年。
● 和歌森太郎ほか『東京百年史　第三巻　「東京人」の形成(明治後期)』東京都、一九七二年。
● 和崎光太郎『明治の〈青年〉』ミネルヴァ書房、二〇一七年。

注

1 連載記事は、日刊『平民新聞』の復刻版である、労働運動史研究会編『日刊平民新聞　明治社会主義史料集　第4集』(明治文献資料刊行会、一九六一年)以外に、谷川ら(一九六九)や山本(一九九九)で読むことができる。なお、この記事の筆者は定かでないが、山川菊栄と親交があった菅谷直子によると、山川菊栄は、筆者は深尾韶だと山川均が言っていたという(関口　二〇一四　三五頁)。

2 『学制百年史　資料編』帝国地方行政学会、一九七二年、四八六頁、参照。ちなみに中学校本科生徒数は、一八八九(明治二二)年には一万一五三〇人であった。同、四八九頁、参照。

3 「女学生の風儀」『教育時論』一八八九年一〇月五日。

4 西村正三郎「学校参観記(高等女学校の評論)」『教育時論』一八八八年五月一五日。

5 「神田高等女学校」『教育時論』一八九〇年四月五日。

6 前掲『学制百年史　資料編』四八六頁によれば、高等女学校本科の生徒数は、一八八九(明治二二)年に三二七四人となりピークを迎えたが、一八九五(明治二八)年には二二七六人まで落ち込んでいる。

7 高等女学校は基本的には四年制であり、中学校は五年制であるため、生徒数全体ではなく入学者数を示した方が、両者の実態の比較がより可能になると考えている。

8 このことについて詳しくは、和歌森ほか(一九七二　一九七〜二〇三頁)参照。また山本武利によれば、『万朝報』は少なくとも一九〇〇(明治三三)年ごろまで東京で発行されている新聞の中で最多の部数を誇っており、あらゆる階層、つまり他の新聞がほとんど開拓できていない下層階層にまで読者がいたという。山本はその理由を、定価の安さと三面記事、とりわけ暴露的艶種に求めている。詳しくは山本(一九八一　九五〜一〇一頁)を参照。ただし、世紀転換期の数年間は、幸徳秋水や堺利彦などが『万朝報』に入社したことにより、社会批判の論説記事も多く掲載されている。また一九〇三(明治三六)年における一日の新聞発行部数は、『二六新報』が一四万二三四〇部と全国一位であり、『万朝報』は『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』に次いで四位であった(山本　一九八一　四一二頁)。両紙がよく読まれていたことがわかる。

9 学生風紀問題について、男性学生の性的身体の管理という観点から読み解いた研究として渋谷(一九九九、二〇一三)、問題化することで生じた「男色」の意味合いの変化を明らかにした研究として前川(二〇一一)がある。参照されたい。

10 たとえば、深谷(一九九六)、渋谷(一九九九、二〇一三)、稲垣(二〇〇一、二〇〇二、二〇〇七)、小山(二〇一〇)などの研究がある。

11 『教育時論』には、他のメディアに掲載された女学生批判がしばしば転載されていたが、それを見ると、『国益新聞』『時事新報』『人民』『東京日々新聞』『都新聞』『民声新報』『大和なでしこ』が、女学生の「堕落」について指摘していたことがわかる。

12 たとえば、社説「新聞記者の責任」『婦女新聞』一九〇一年七月一五日、「所謂女学生の醜聞」同、一九〇二年七月二一日、社説「二六新報記者に呈す」同、一九〇二年九月八日、社説「女学生の冤罪」同、一九〇二年一二月七日、「女学生の取締」『教育時論』一九〇二年七月五日、「女学生腐敗の声」『中央公論』一九〇二年一〇月、「女学生の説」『万朝報』一九〇二年一一月一六日、などの記事がある。

13 たとえば、「実例第七の取消」『二六新報』一九〇二年一〇月二二日、参照。

14 「女学生腐敗の声」『中央公論』一九〇二年一〇月。

15 たとえば、「女生徒奢侈の傾向」『教育時論』一九〇二年五月一五日、竹内紅蓮「所謂女学生問題」『女学世界』一九〇五年六月、参照。ただこれには女学生の出身階層、つまり女学生が中・上流階層の出身であるということも関係していた。

16 「毛錐余憤」『教育時論』一九〇二年五月五日。

17 峰間信吉「府県立高等女学校の程度を論ず」『教育時論』一九〇六年五月二五日。なお、峰間は東京府立第三高等女学校の教諭であった。

18 「文部省女学生取締を内訓す」『二六新報』一九〇二年九月一八日、「女学生取締の内訓」『教育時論』一九〇二年九月二五日、参照。またこの間の文部省の動きについて詳しくは、小山（二〇一〇二二七〜二三〇頁）を参照されたい。

19 これは女学生のみを念頭に出されたものではないが、学生の風儀に関して憂慮すべきこととして指摘された五点の一つに、男女間の風紀問題が含まれていた。

20 この内容については、「改正女子訓」『教育時論』一九〇九年一〇月一五日、参照。

21 日刊『平民新聞』の発行に関わっていた、幸徳・堺・石川が『万朝報』に勤めていたことを指していると思われる。さらにいえば、西川は『二六新報』に勤めていた。

22 「目白の花柳郷（一四）」（二月五日）では、招待会で接待する女学生を次のように描写していた。「腕の肉胸の肌あらはなるものあり白き改良服の柳の腰なよやかなるものあり殊更に袴を取り捨て裾模様目さむるばかりなるもあり紅黄紫白のリボン一足毎にゆれて天女の羽衣今目のあたり降れるが如き心地す」。

23 夫である下田猛雄が亡くなったのは、一八八四（明治一七）年、彼女が二九歳の時である。

24 残りの主な誹謗中傷記事は、彼女が高い地位に就き、高給を取りながら、多額の負債を抱え、経済的に困窮しているという内容であり、「泥棒根性あり」（四月一三日）とまで書かれていた。なお、これらのバッシング記事に対して下田自身が示した反応を知ることができる史料は、管見の限りではないように思う。

25 他に、下田を取りあげている小説としては、松本清張『小説東京帝国大学』や井上ひさし「海老茶式部の母」があるし、森鴎外『青年』にも下田をモデルにした女性が登場している。

（こやま・しずこ／京都大学 名誉教授）

Contribution

Female-bashing in 1900s Japan: The Insults on Shimoda Utako and Female students

KOYAMA Shizuko

Shimoda Utako (1854–1936), a renowned female educator, was severely criticized in the socialist daily newspaper *The Heimin Shinbun* in 1907. The newspaper insulted her and printed as many as 41 serial articles between February 24th and April 13th where she was referred to as "the vamp." This paper examines the logic and background of the Shimoda-bashing in relation to contemporary insults directed at female students, and considers their historical meaning.

The results are the following. First, Shimoda, along with female students, was sexualized, and baselessly slandered in the media as being sexually "corrupt." Second, both Shimoda and female students were perceived as threats to the conventional gender order, who challenged the traditional idea of femininity, since Shimoda was active in a male-dominated area and female students were considered to be getting secondary education that was supposed to belong to men. Third, Shimoda, in particular, was seen as an "enemy of the working class" by socialists in the context of class conflict. The relentless personal attacks on Shimoda were based on a two-fold antipathy toward her, induced by class politics as well as gender politics.